

[編集後記]

ISSN 番号を取得し、ここに第 10 号をお届けする。皆様のご投稿と、会計の安定化によって、年 1 回刊行を維持できたことを感謝したい。編集委員のみでは専門領域を覆うことができず、匿名の複数の外部査読者の皆様には、惜しみないご協力をいただいた。この場を借りて深謝申し上げます。にもかかわらず、3 編の投稿をいただきながら、2 編の掲載にとどまったことをお詫びしなければならない。今後は、忙しい日常のかたわらご投稿くださる皆様の執筆日程に無理が生じないように、投稿規定と編集日程の公開整備をさらに積極的に考えていきたいと思う。

今号の 2 編は、いずれも学生会員の労作である。田中大暉氏の「松本市周辺の「木遣り」について―一唄の音楽的特徴とその類型―」は、音楽学の観点から考察された。信州大学人文科学研究科 濱崎友絵准教授のご推薦により、本会で口頭発表の後、投稿を得た。第 9 号では、田中真理氏の論文が文学と民俗学の観点から木遣りの詞章分析をされている。諏訪から松本地域にかけての木遣りをめぐって、本誌上で多方面から考察されることは、研究上意義深いことと思う。

永井彩音氏の「自然談話資料にみるマイナス待遇表現の男女差―長野県北信地方若年層話者を対象に―」は、信州大学人文学部の卒業論文に加筆されたもので、やはり、本会での口頭発表を経ての投稿である。自然談話を対象に、気づかれにくい点に男女差がみられることを実証している。地域言語の研究としても、社会言語学の研究としても、新しい指摘がみられる。

長野・言語文化研究会は、故馬瀬良雄先生が創設され、2000 年 12 月 9 日第 1 回研究発表会をもって正式に発足した（『ことばと文化』創刊号より）。今年度で研究発表会が 100 回を超え、会誌発刊も 10 号を数えた。今後も先生の想いを受け継いで、会員ばかりではなく、広くことばと文化に関心のある皆様が集えるような会を目指したいと願う。会誌についても、引き続き、皆様からの積極的な投稿をお待ちしたい。(H. O)